第14回「泉大津オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

伴奏

宮﨑　みちる・千葉県習志野市

小学三年生の時、校内合唱会でピアノの伴奏をすることになった。どういういきさつでそうなったのか思い出せないのだが、少なくとも自ら進んでということはない。私は引っ込み思案だったし、当時は多くの子供たちがピアノを習っており、私よりも上手な子がたくさんいた。私はレッスンがそれほど好きではなく、上達も遅かった。

先生から渡された楽譜の重みを、今でも忘れない。家に帰って早速弾いてみたが、やはり私には難しかった。慌ててピアノの先生に相談して、一部、簡単に弾けるよう編曲してもらった。

それからは毎日、ピアノにかじりついて練習した。給食を早く食べ終えては音楽室へ。放課後はまっすぐに帰宅して。だが、なかなか思い通りには弾けず、どこかで必ずつっかえた。焦りが募るばかりだった。

誰かに代わってもらおうと、何回思ったことだろう。でも、それは出来なかった。というのも、母が合唱会用にワンピースを縫っていたからだ。私が伴奏者になったと知ると、母は大喜びをして、いそいそと縫い始めた。舞台袖の幕間でも目立つようにと黄色いレース生地を選び、弾く時の邪魔にならないようにと袖を細くする。フレアースカートの裾とウエストの切り替え部分にはフリルを付け、胸にはチロリアンテープを貼って・・・。母のアイデアは、とどまることを知らなかった。余りにも楽しそうに語るので、今更辞めるなどと言って傷つけたくなかった。それに母は同級生のお母さんに裁縫を習っていたので、私の伴奏の話は、早くから多くの人に知れ渡っているはず・・・。私の上達がうまくいかないのとは裏腹に、ワンピースは着実に出来上がっていった。いつもならだんだん出来上がっていくのを見ることは楽しいのに、このときばかりは恐怖を感じた。いっそのこと出来上がらなければいいのにと、思ったりした。

そんな中、私はいつの間にか、クラスで仲間外れにされていることに気がついた。昼休みに音楽室から戻ってくると、椅子を寄せて集まっていた女の子たちがパッと散るのだ。仲の良かった子に

「何してたの？」

と、聞いても

「別に」

と、よそよそしく答えるばかりだった。無理もない。私は昼休みも放課後も、付き合いを断っていたのだから。伴奏なんか引き受けなければよかった。頑張っているのに、ひとりぼっち。ショックは大きかったが、今はとにかく伴奏に集中しようと思った。

そうこうしているうちに、とうとう本番の日がやってきた。

出来立てのワンピースに袖を通すと、ぴったりだった。

「うん、似合ってる」

母は満足そうに頷いた。

「大丈夫、絶対うまくいくよ」

緊張で朝食も満足に食べられなかった私を、母は背中を軽くたたいて送り出してくれた。

少し早めに登校し、音楽室で練習をしてから教室に入ると、女の子たちに取り囲まれた。

「はい、これ」

と、渡されたのはピンク色と水色のリリアン編みの輪っかが二本。

「うまく弾けるお守りのブレスレット」

当時、子供たちの間で、リリアン編みが流行っていた。片手にすっぽり入るほどの小さなプラスチックの編み機があり、先に細い突起が出ている。そこにリリアン糸を引っ掻けて一目一目すくい取っていくと、筒状の紐が編めた。

「みんなでおまじないしながら、編んだの」

昼休みに女の子たちが集まっていたのは、私に内緒でこれを編むためだったのか。

「ありがとう」

嬉しかった。私は、さっそく両手に一本ずつ付けた。みんなのぬくもりが伝わってきて、俄然、勇気が湧いてきた。

いよいよ本番。

薄暗い舞台の袖で待っている時は緊張したものの、舞台に出てしまうと意外に落ち着いていた。私は、無我夢中で弾いた。そしてなんと、一度もつっかえずに弾き終えることが出来た！我ながら、今迄で一番の出来だった。

礼をして舞台の袖に入ると、みんなの笑顔に囲まれた。

「よかったよ」

「これのお陰だよ」

私は、ブレスレットの両手を掲げた。

ひとりじゃなかった。伴奏を続けられたのも、練習に打ち込めたのも、周りの人が支えてくれていたお陰だと気がついた。

「ほら、さっさと進みなさい！」

弾むような先生の声を聞きながら、伴奏をしてよかったと、私は思った。　（了）